

例 言

1. 本書は、埼玉県入間郡大井町の個人住宅建設などの小規模開発に伴う、記録保存のための町内遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理事業は、国（1,750,000円）、県（875,000円）の補助金を受け、平成2年5月8日から平成3年3月30日まで実施した。

3. 調査組織

調査主体者	大井町教育委員会
教育長	小林 茂吉
社会教育課長	吉田 和子
町史・文化財係長	多田 威
町史・文化財係	坪田 幹男・桜井 信枝・高崎 直成
発掘調査担当者	坪田 幹男・高崎 直成

4. 本書の執筆は調査担当者が下記のように分担した。

I・II-1・3・III・IV・VII・VIII・IX章：坪田、II-2・V・VI章：高崎。

遺構図版作成は小林登喜枝、土器実測図版作成は高崎があたり、土器拓影図作成には整理事業参加者全員の協力を得た。また本書の編集・挿図の作成については今井堯氏の絶大な援助と協力を得た。

5. 各遺跡の調査から報告書刊行に至るまで下記の諸氏、機関よりご指導、ご協力を賜った。

荒井幹夫、今井堯、内田賢司、神木繁嘉、小出輝雄、駒井和久、佐藤正志、笹森健一、谷井彪、塚田政子、早坂廣人、松本新八郎、松本富雄、三上七五郎、柳井章宏、和田晋治、
(敬称略)

埼玉県教育局指導部文化財保護課、大井町大井・苗間第一土地区画整理組合、亀久保特定土地区画整理組合、大井町遺跡調査会

6. 発掘調査ならびに整理事業参加者は下記の皆様である。銘記して、謝意を表したい。

(発掘調査参加者) 敬称略

会沢泉、浅野昭夫、新井唯二、飯塚泰子、石川与一、井坪志津子、井上晴江、内田信治、海老原サナエ、大曾根キク子、太田明代、奥村友子、遠田つる、笠原英子、金子君子、神木光治、木村美和子、小林こずい、佐久間ひろ子、佐藤至一、柴田しづ子、鈴木英子、鈴木健蔵、関田成美、高木千恵子、田村福次郎、中嶋末子、中島優子、並木宗次、野岡由紀子、野沢松代、林きぬ子、比嘉洋子、細谷清作、松木美恵子、山内栄美子、山下一枝、弓和子、若林紀美代

(整理事業参加者) 敬称略

石垣ゆき子、須藤さち子、柚木嘉図子、高橋けい子、中田藤子、中野和子

凡 例

1. 本書の図版の縮尺は、住居・土坑 $\frac{1}{60}$ ・炉 $\frac{1}{30}$ ・土器実測図 $\frac{1}{4}$ ・土器拓影図 $\frac{1}{3}$ とした。
2. 遺構図中の細数字は床面もしくは確認面からの深さ(cm)を示す。
3. 胎土粒子に関する各項の規準は次のように定めた。
小礫：2.0mm以上、粗砂：0.2～2mm、細砂：0.2mm以下。
4. 土器図の断面図の表図は、「網目」が繊維含有、「黒丸」が雲母末を含有する縄文土器を表わしている。

I 経緯

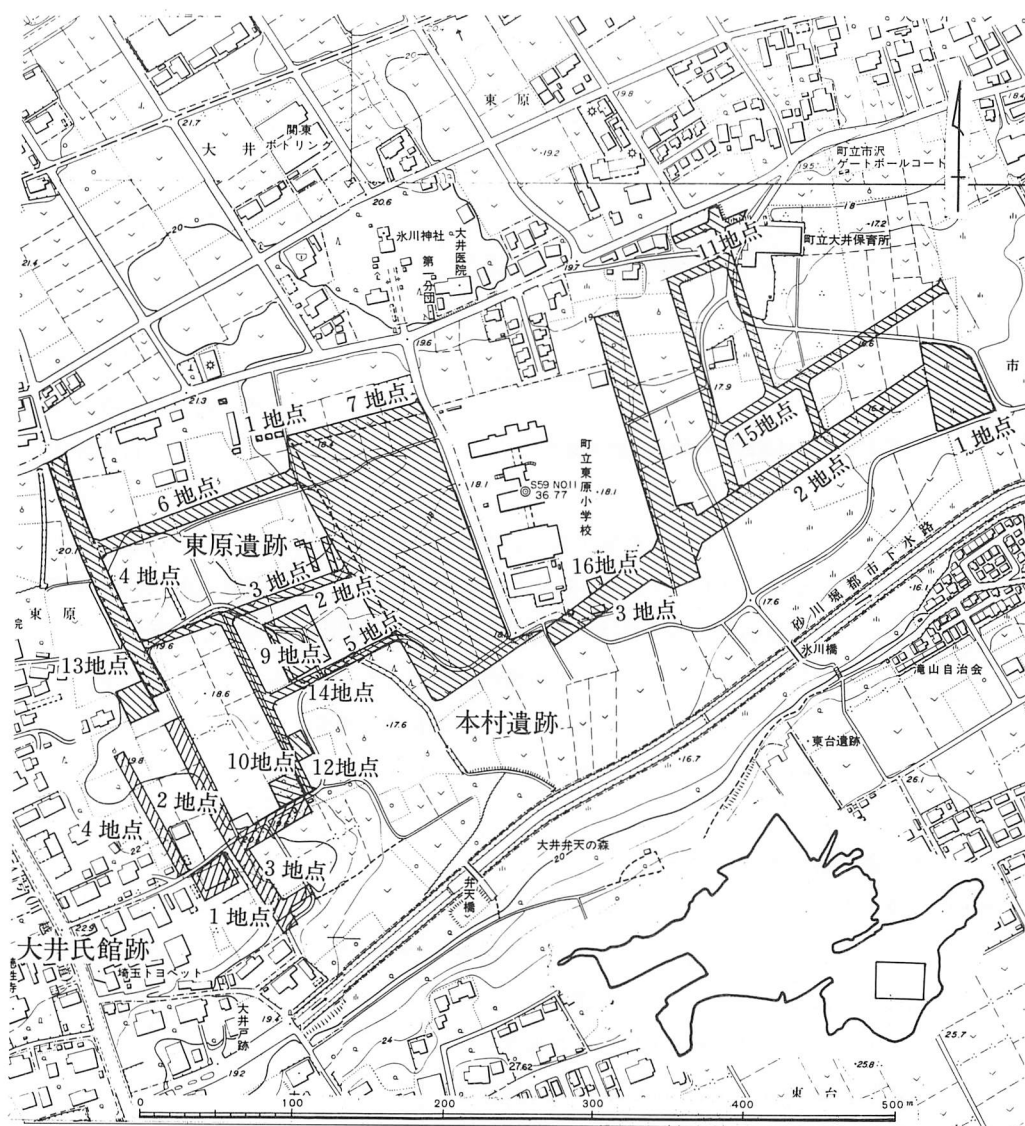
○ 調査に至る経緯

埼玉県大井町は、首都圏30km圏内の県西南部に位置する。かつては畑作を中心とする純農村地帯であったが、昭和40～50年代にかけて人口で約22,000人、6,000戸が急増した。面積8kmで現在の人口は39,000人を超えている。昭和60年代以降は、大規模な土地区画整理事業が進められ、町内遺跡の約80%近くがその区域内に位置しているため、土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が町遺跡調査会により通年実施されてきている。町では、1978年以来国庫補助を受けて「町内東部遺跡群発掘調査事業」として民間の小規模開発に対処するため、埋蔵文化財の調査を実施してきた。遺跡の調査は、庁内関係各課と連絡調整をして行ってきた。農業委員会事務局から農地転用許可申請段階、また建設課から開発事前協議建築確認等の申請段階でそれぞれチェックされ、教育委員会は遺跡地図と照合のうえ現地踏査を実施し、遺跡の状況を確認したうえ、遺跡に影響を及ぼすとみなされる工事主体者に連絡し、協議を行った。その結果、教育委員会が記録保存のための発掘調査を工事主体者から依頼され、教育委員会が発掘調査主体者となって調査を実施することになったものである。平成2年度の調査は、下記の17箇所であった。民間及び公共事業に伴う埋蔵文化財の試掘調査についても、国庫補助事業として対応した。

No.	遺 跡 地 点 名	所 在 地	開発面積	調査原因	調査期間
1	本村遺跡第12地点	大井町大字大井240,241～4	340㎡	個人住宅建設	2.5.8～5.9
2	亀居遺跡第20地点	〃 亀久保1,001-3	118㎡	個人住宅建設	5.21～5.25
3	江川南遺跡第2地点(試掘調査)	〃 東久保1丁目120-3	580㎡	集合住宅建設	5.28～5.31
4	西ノ原遺跡第43地点	〃 苗間153-3	272㎡	個人住宅建設	6.26～7.9
5	本村遺跡第13地点	〃 大井180	428㎡	個人住宅建設	7.25～7.26
6	東台遺跡第16地点(試掘調査)	〃 大井713-4,5	3,048㎡	資材置場設置	8.1～8.4
7	苗間東久保遺跡第16地点(試掘調査)	〃 苗間645-1	390㎡	集合住宅建設	8.21～8.24
8	亀居遺跡第23地点	〃 亀久保1,001-14,15	160㎡	個人住宅建設	9.3～9.10
9	東台遺跡第17地点(試掘調査)	〃 大井621-1	1,470㎡	診療所建設	9.5～9.12
10	小田久保遺跡第1地点(試掘調査)	〃 大井1,223-3	694㎡	資材置場設置	10.12～10.18
11	本村遺跡第16地点(試掘調査)	〃 大井110-2	230㎡	学童保育所設置	11.6～11.13
12	亀居遺跡第28地点	〃 亀久保995-6	475㎡	個人住宅建設	3.1.24～2.1
13	亀居遺跡第26地点	〃 亀久保1,001-14	259㎡	個人住宅建設	2.14～3.15
14	亀居遺跡第25地点	〃 亀久保995-7	162㎡	個人住宅建設	3.12～3.16
15	苗間東久保遺跡第17地点(試掘調査)	〃 苗間636-4	583㎡	駐車場設置	3.12～3.15
16	中沢前遺跡第2地点	〃 苗間221-3	1,333㎡	個人住宅建設	3.14～3.18
17	東台遺跡第18地点(試掘調査)	〃 大井588	20,000㎡	集合住宅建設	3.25～3.29

本報告では、時間の制約上No.12までにとどめたが、3.江川南遺跡第2地点、7.苗間東久保遺跡第16地点、9.東台遺跡第17地点、11.本村遺跡第16地点の本調査の概要を参考資料として巻末に掲載した。

II 本村遺跡



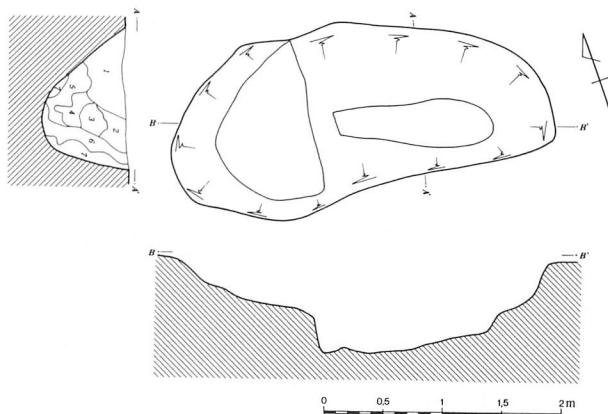
第2図 本村遺跡の地形と調査区 (1/5000)

1. 遺跡の立地と概要

中世～近世初頭の集落遺跡である。所沢市の狭山丘陵北麓を源とする砂川堀によって大きく開析された北側の低位台地上に立地する。遺跡の標高は西で20 m、東で16 mとゆるやかな傾斜のまま低地へと移り変わっている。これまでの調査で、井戸、柵列、土壇墓、掘立柱建物址群が数多く検出されているが、遺物は遺構数に比較してきわめて少ない。

調査の経過 個人住宅建設の申請により、1990年7月25日から重機による表土はぎを行った。黄褐色のローム面が確認できたが、精査の結果、調査区北東隅に遺構覆土が検出されただけであった。土坑を調査し、実測と写真撮影後、7月26日調査を終了した。なお、旧石器の調査については、盛土を行うため地下の遺構・遺物に影響はないと判断し、実施しなかった。

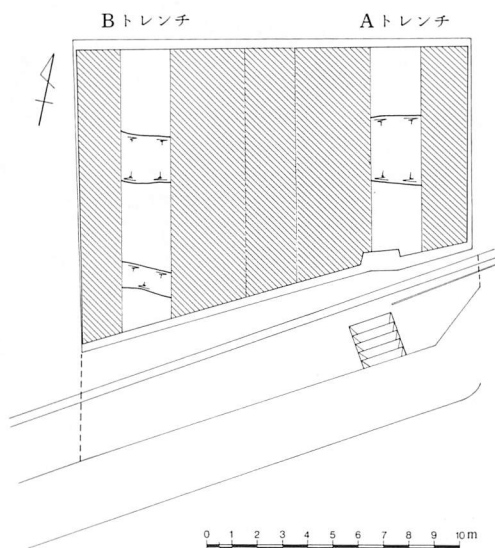
土 坑 検出された遺構は土坑1基のみである。平面は楕円形を呈し、長軸325cm・短軸147cmを計る。底面は有段で西側にテラスをもち、最深部で85cmを計る。覆土は1層から5層まで暗褐色土で、2・3層が硬く締まる。焼土粒・ローム粒などは下層へ行くに従い少なくなる。6層は褐色土で、ローム粒が多く、硬い。7層はローム主体である。遺物の検出はなかった。



第6図 本村遺跡第13地点土坑 ($\frac{1}{60}$)

II-3 本村遺跡第16地点 (試掘調査)

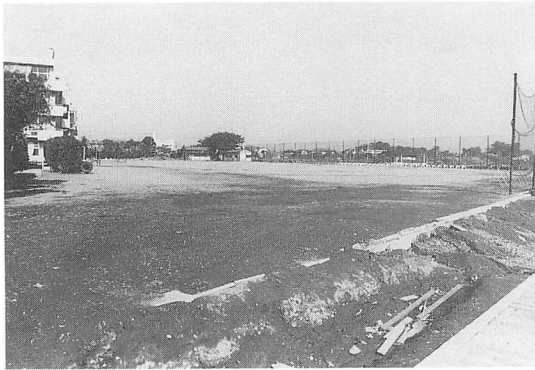
大井・苗間第一土地区画整理事業が1986(昭和61)年から10年計画で実施され、これに伴って埋蔵文化財発掘調査件数、面積は急激に増加してきている。特に西ノ原遺跡と本遺跡には都市計画道路が縦横に計画され、さらには東原小学校校庭の移設にあたり、校庭予定地13,000㎡の発掘調査が1989年度に大井町遺跡調査会により行なわれ、調査区全域にわたり遺構が検出された。本地点は東原小学校の校庭北東隅に建つ学童保育所の移転に先立つ調査である。予定地は校庭の一角のため、造成の際に相当厚く盛られたこと、人力では困難なため試掘調査ではあったが、重機を導入し2本のトレンチを開掘した。周辺の地形からみて当該地点では、西と北方向から緩やかに高さを減じているところから、グラウンドの盛土も北側では薄く、南で厚いことは予想されたが、試掘の結果、Aトレンチでは約85～95cmが盛土で、その直下に旧地表面の暗褐色土が30～40cm堆積していた。遺構確認面まで深い所では130cmを越えていた。2本のトレンチで、茶褐色土を覆土にもつ溝状遺構を確認できたため、12月14日から本調査に着手した。(69ページ参照)



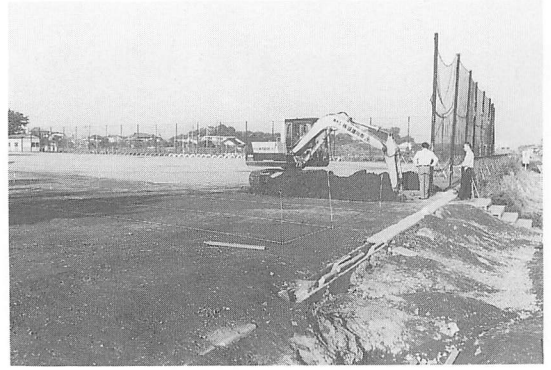
第7図 本村遺跡第16地点試掘区域図 ($\frac{1}{300}$)

図版 2

本村遺跡第16地点（試掘調査）



調査区近景



表土除去状況

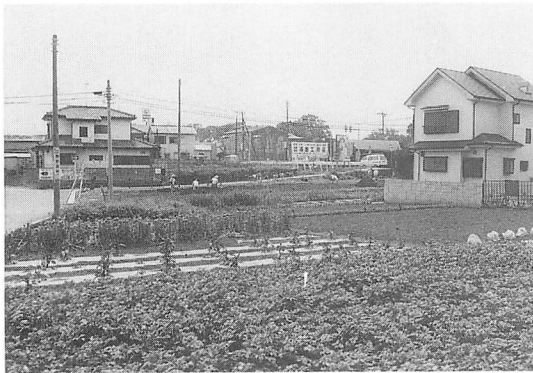


試掘調査風景



溝状遺構プラン

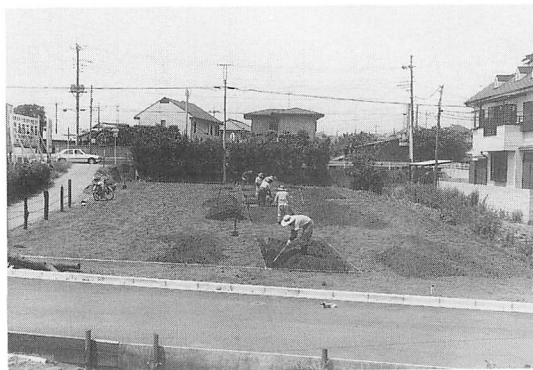
江川南遺跡第2地点（試掘調査）



調査区近景（南より）



調査区近景（東より）



試掘調査風景



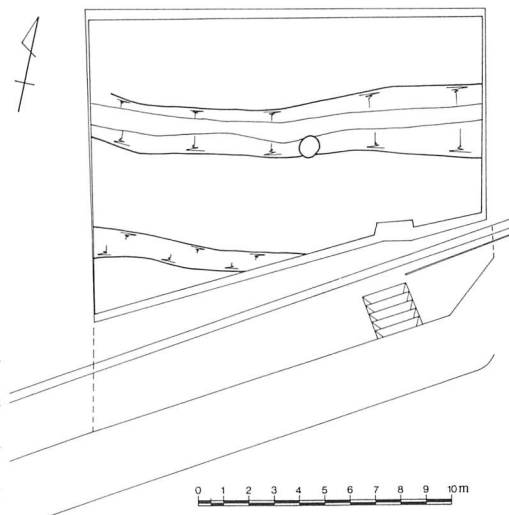
試掘調査風景

本村遺跡第16地点

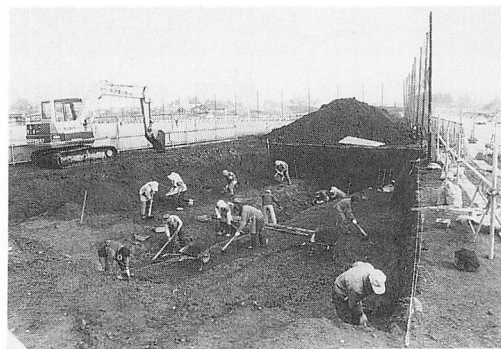
1. 発見された遺構と遺物（第11回）

1990年11月6日より実施した試掘調査の結果、ほぼ南北に設定したA・Bトレンチから溝状の遺構と思われるプランを確認できたため、同年12月11日から大井町遺跡調査会による発掘調査が開始された。調査区域の現況は小学校のグラウンドであるため、当初学校造成時に一部掘削が行われその後盛土をし、グラウンド整地がされたのではと予想されたが、試掘調査の時点でその心配は払拭された。現地表面から旧地表面まで、いわゆる盛土層厚は85～95cmもあり、その直下に旧地表面の暗褐色が30～40cm程堆積していた。遺構確認面まで現地表面から120cmあったため表土はぎはすべて重機にたよった。今調査において検出された遺構・遺物の所属時期は中世のものである。

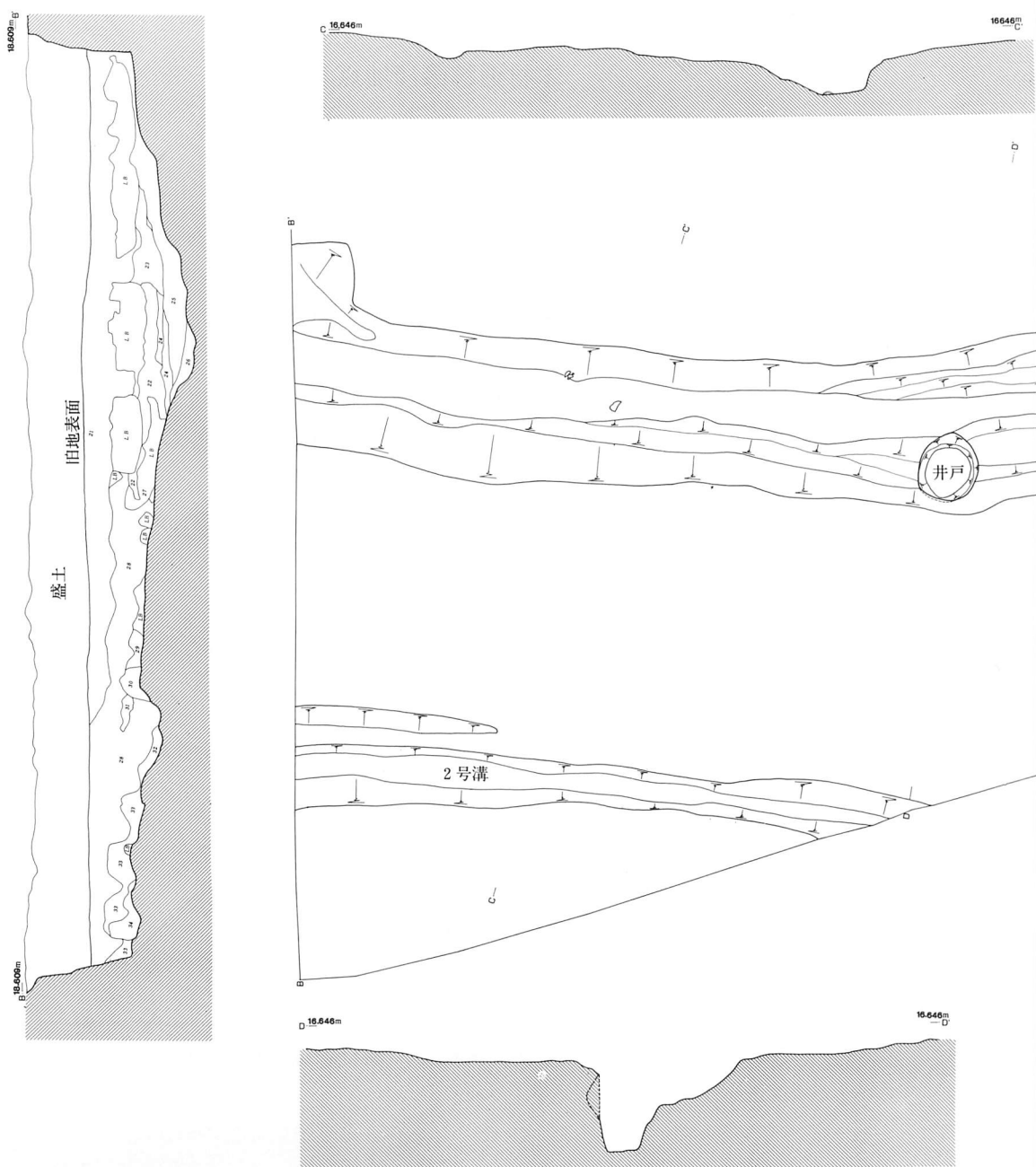
2 遺 構（第2図） 溝状遺構2条と井戸跡1基が確認された。1号溝は調査区のほぼ中央部を東西に走っている。確認された長さは15m 上幅は東側の広いところで3m、狭い部分で1.7m・底幅0.6mであるが、遺構確認面が西側で低かったため、確認時での上幅は当然狭くなっている。確認面からの深さは西で80cm・東120cmでレベルは東へ向かって減じている。溝底直上、もしくは壁直上よりカワラケ、石臼片等の遺物が出土した。2号溝は1号溝の南4mに平行するように検出された。長さ7.5m、上幅80cm、底幅20～40cm、掘り込みは浅く25cm程度である。井戸跡は1号溝の南壁で確認された。1号溝の壁面を精査中に井戸プランを検出できた。しかしプランは明瞭ではなく溝の壁面の粘土が一部覆われていたため、溝構築以前の



第1図 本村遺跡第16地点遺構配置図 (1/300)



本村遺跡第16地点 表土除去・遺構精査作業風景

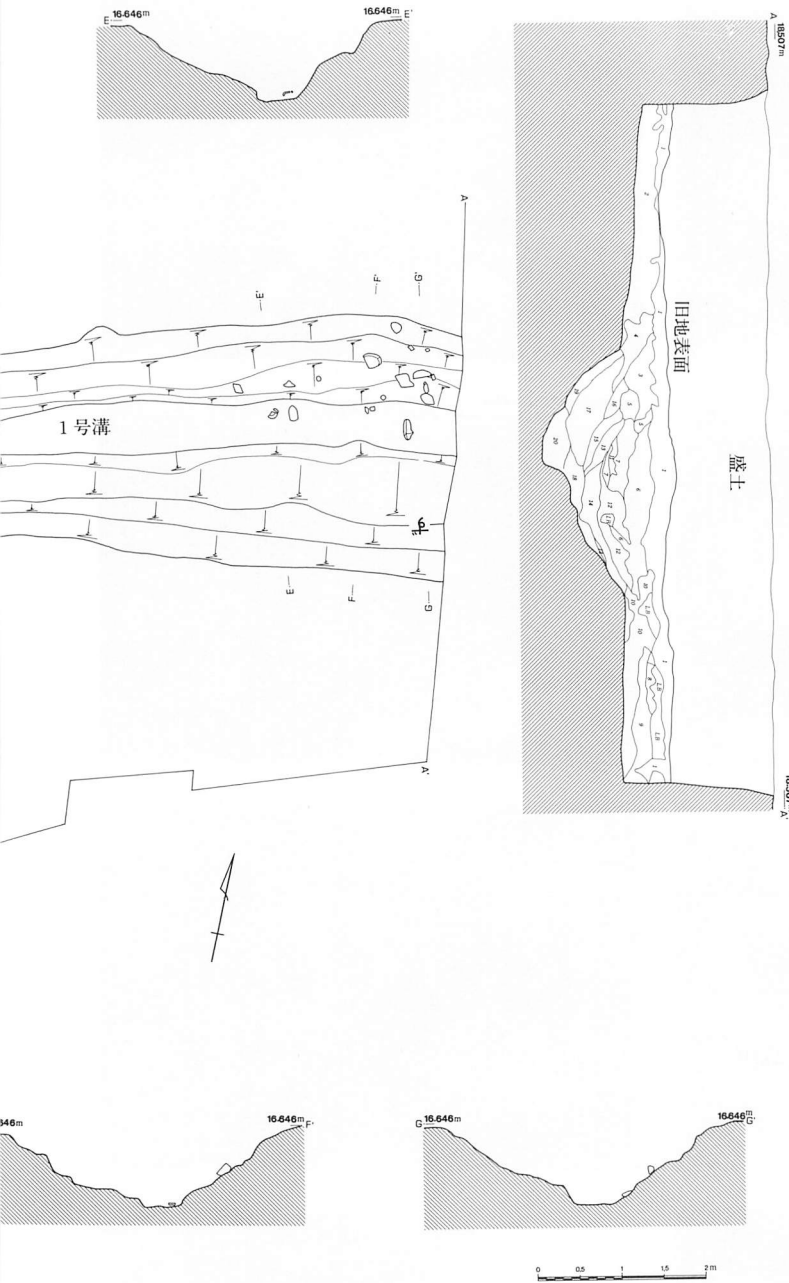


第2図 本村遺跡第16地点

遺構である。

〈土層説明〉

A—A'面, 1. ローム小ブロック・粒子を含む暗褐色土。2. ロームの大塊である。1が混入している。3. ロームブロックを含む茶褐色土。4. 3より明るい茶褐色土。5. 3と1の混土層。6. 多量のロームブロックを含む茶褐色土。7. 6よりもロームを含む。8. ローム



小ブロックを含む黒褐色土。9. 赤茶褐色ロームと暗褐色の混土層。10. 1にロームブロックを含む。11. 黒褐色土。12. 緻密な黒褐色土。13. 薄い灰褐色土。14. 灰褐色土。15. 茶褐色土が多くはいりこむ灰褐色土。16. ローム粒子を多く含む灰褐色土。17. 赤茶褐色土を多く含む薄い灰褐色土。18. 砂を多く含む灰褐色土。19. 赤褐色土を多く含む薄い灰褐色土。20. 肌色の粘土層をブロック状に含む灰褐色土。溝底は立川砂礫層にまで達している。

B—B'面, 21. ローム小ブロック粒子を含む暗褐色土。22. ロームブロックを多く含む黒褐色土。23. ロームブロックを大量に含む茶褐色土。24. 礫を含む粘土質暗褐色土。25. ロームブロックを若干含む粘性にとんだ暗褐色土。26. ロームブロック, 粒子を含む茶褐色層。27. 23に近いロームブロックを含まない茶褐色土。28. ロームブロックを少し含む黒褐色土。29. しまりの強い黒褐色土。30. 茶褐色土。31. ロームを帯状に含む黒褐色土。32. ローム粒子を含む暗褐色土。33. ロームブロックを含む黒褐色土。34. ロームブ

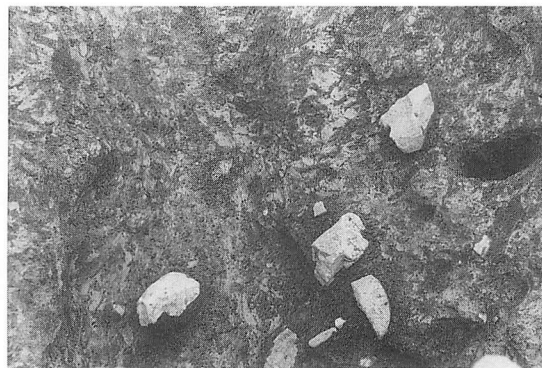
溝・井戸遺構図 (1/80)

ックを大量に含む黒褐色土。

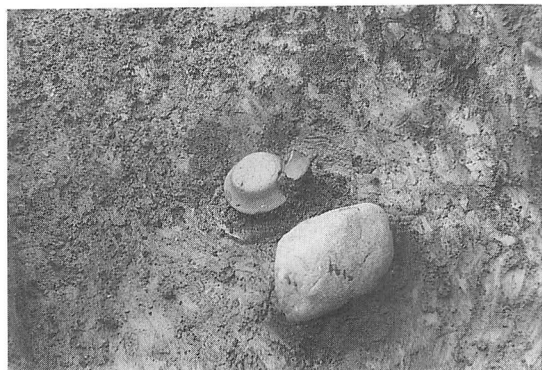
(総括) 1号溝の立ちあがり両側には, ローム層の大塊と褐色土の混じった土塁的な存在を想定させる1・2・10層は, 確認段階では, いわゆる地山と見誤る程のローム量であった。1号溝の覆土の主体は3~5, 12~20の灰褐色を呈するレンズ状の土で, いずれも溝の北側からの流れ込みを窺わせる。6, 7, 11は, いわゆるローム混じりのグズグズの攪乱層に似た土で浮



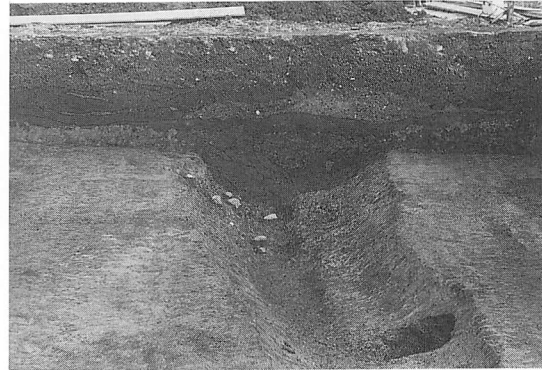
遺物出土状態（1号溝）



石臼出土状態



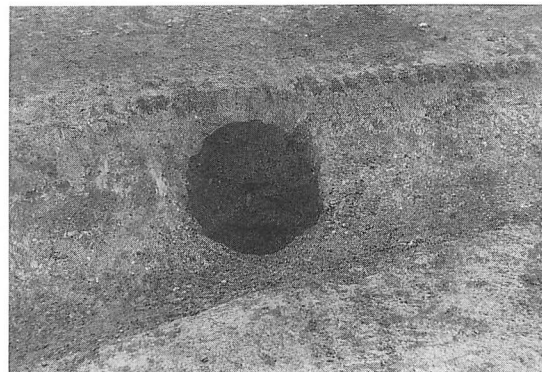
カワラケ出土状態



調査区東壁土層



調査区西壁土層



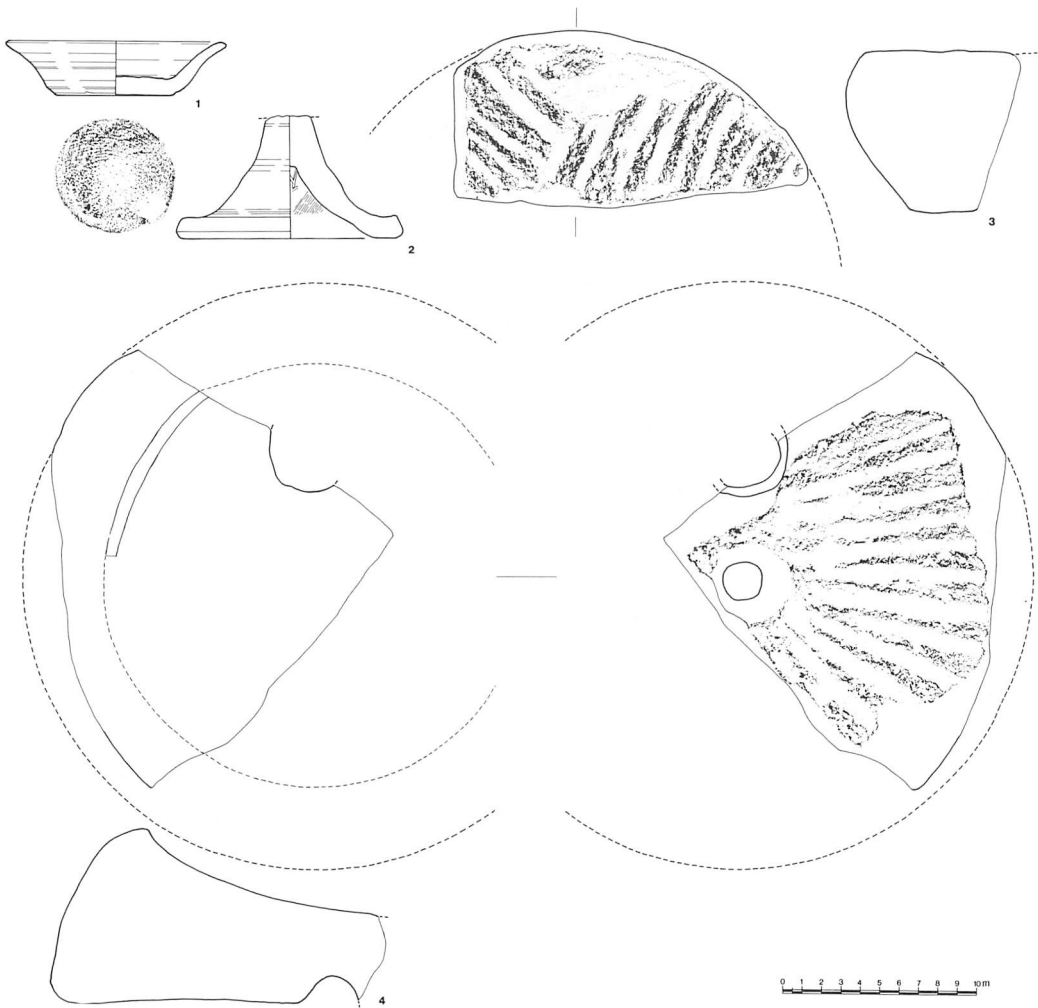
井戸



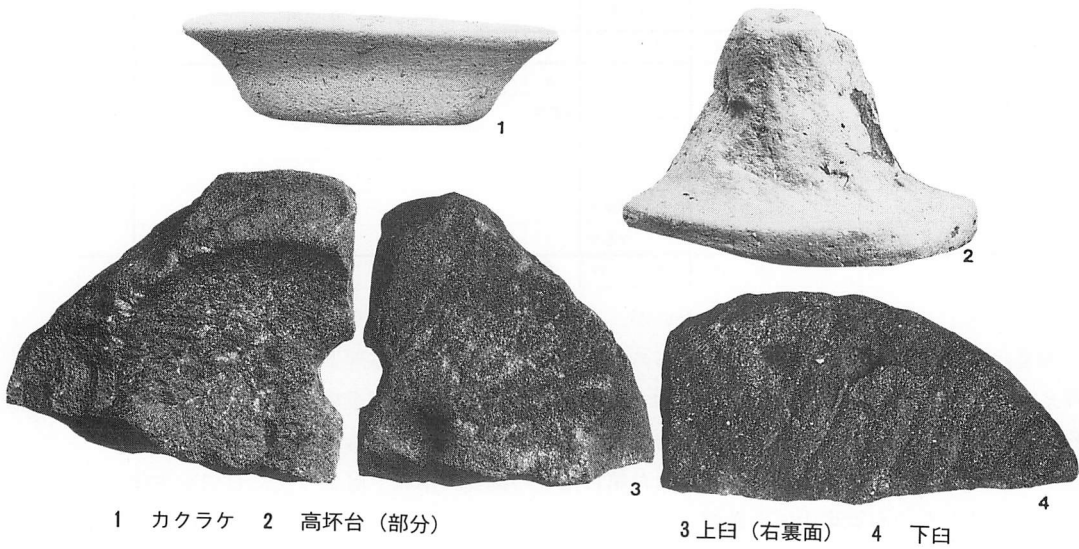
1号溝全景（東より）



調査区全景（東より）



第3図 本村遺跡第16地点出土遺物 ($\frac{1}{4}$)



いた状態になっている。B—B'面にみられる1号溝の覆土上層に、厚さ40cmのロームブロックの塊が覆い、溝が埋没した後にローム塊を意図的にかぶしているようだ。

井戸は径90×80cmの円形を呈し、高い確認面からの深さは60cmを測る。底径は65×60cmである。断面形はほぼ筒形に立ち上がるが、南壁の一部が剝落している。

3. 出土遺物（第3図）

いずれも1号溝の底面、壁際より出土した。1は口径105mm、底径59mm、高さ31mmで、底には回転糸切痕を残すカワラケである。底直上に約6mmの段をつくる。口唇部は外反する。器体の内・外面・底部内側にロクロ回転痕が残る。胎土には橙色粒子・細砂粒を含み、焼成良好で橙褐色を呈する。2は高坏台部である。坏部との接合部以下が現存し、底径116mm、現高54mm、台部には甘い稜がつくれ、台部底と脚部内側に細い櫛状工具で一部整形を行っている。脚部の仕上げ整形は省略され一部で角張っている。白色細砂粒を胎土に含み、焼成は甘くもろい。色調は暗褐色を呈する。3、4は石製品である。3は下臼で $\frac{1}{6}$ 残存。推定径28cm、高さ8.5cm。磨面は平坦で磨滅が著しい。一部にススが付着している。石材は花崗岩。4は上臼。 $\frac{1}{4}$ 残存。推定径31cm。芯穴径3.5cm。高さ9cm。供給口の一部を残している。磨面は磨滅が著しい。石材は安山岩。3、4ともにいわゆる粉挽キ臼である。

4. まとめ

本村遺跡の名称由来は現在の東原小学校一帯を、いわゆる「本村（ほむら）」と呼んでいたことによるが、それまでは二遺跡を周知の遺跡として登録していた。つまり東原小学校西側を東原遺跡、東側を弁天後遺跡としていたが、土地区画整理等によりそれぞれの調査進展から遺跡の性質・種類が同一であるとの判断から、1989年9月に二遺跡を併合して本村遺跡と改称した。調査地点は既に17を数えているが、旧石器時代、縄文時代、中世～近世の遺構等が確認され、特に旧石器時代では立川ローム第Ⅳ層～第Ⅶ層にまたがる良好な石器群（注1）が検出されてきているが、ここでは中世期の本遺跡についての遺構を概観してまとめにかえたい。

本遺跡は文字どおり中世～近世前半にかけての大井郷の本村的性格を有した遺跡である。既調査検出遺構の内、該期のものを抽出すると次のとおりである。（欠番地点は遺構検出無）

調査 地点 遺 構	東 原 遺 跡					弁天後遺跡		本 村 遺 跡									合 計
	2	3	4	5	6	2	3	8	10	12	13	14	15	16	17		
井 戸 跡			4	1			20	28				2	13	1		69	
土壇(墓)	5			13	3	2	88	(未整理)		1	1	31	33			177	
溝	2	1		3	3		1	7	1			2	3	2		25	
地下式竈	1	1													1	3	
掘立柱建物址						1	(未整理)									1	
ピット	15	12					(未整理)								(未整理)		
調 査 年	'79	'80	'87	'88	'89	'87	'88	'89	'90	'90	'90		'90	'90	'90		

紙数の関係上、調査箇所を図示できないが、井戸跡は遺跡のほぼ中央部の水脈に沿って穿たれ土壇墓は集落の縁辺部に配置されているのが窺えそうだが、未だ整理進次のため安易な分析は控えたい。最後に発掘調査に対し御協力・御理解いただいた大井町役場福祉課、教育委員会総務課、大井・苗間第一土地区画整理組合に対し心よりお礼申しあげる。

注1 1991年1月～2月にかけて行われた第17地点の調査。第Ⅶ下層より主に頁岩を主体とする3ヶ所の石器集中区を確認。
(坪田 幹男)